

被災者の“思い”に寄り添う

「NPO法人 陸前たがだ八起プロジェクト」

理事・蒲生 哲さん



団体の、活動ノウハウを公開する

活動 なう

[第1回]



▶蒲生さん（左から3人目）とスタッフの皆さん

蒲生 哲さんのプロフィール

昭和38年生まれ。陸前高田市広田町出身。震災以前はモビリアキャンプ場の支配人をしてきた。現在はそのキャンプ場を拠点にして特定非営利活動法人「陸前たがだ八起プロジェクト」理事・事務局長として復興支援に力を注いでいる。



▲NPO法人設立を記念して行われた大だるま給かき

私は、14年間このオートキャンプ場モビリアの支配人をしており、昨年3月11日の東日本大震災のおり、市内が一望出来る施設内の展望台で、午後3時から夕方6時まで茫然と立ち尽くした。目の前で街が消え、目の前の7万本の松が一気に消え、目の前で2千人が亡くなる姿を見てしまった。ここは高台になっているためか、皆さん上へ、上へと避難してきて、気がついたら300人ほど集まっていた。ここは避難所ではなかったが、この人達を何とかしなくてはいけないと思い、独断でここに避難所を開設した。

■組織はこうして立ち上がった

東日本大震災発生後、蒲生哲さんらは、オートキャンプ場モビリアに開設された自主避難所の運営支援を行ってきた。避難所が解散され、モビリア内に仮設住宅が建設された後は、仮設住宅支援に携わってきた。そして、今年3月2日にNPO法人を設立登記した。蒲生さんに復興支援組織の活動ノウハウを聞いた。

■陸前たがだ八起プロジェクトの支援

6月下旬頃、避難してきた人達がこの避難所から仮設住宅（168世帯380人）に移ったので一段落したんだなと思ってた。ところが、中越防災安全推進機構から、「蒲生さんこれからだよ。」と言われ、その時は意味が分からなかった。仮設住宅に入居して皆さんそれぞれプライバシーは守られるけれども、この人達はいずれ本設に移る。その人達が仮設住宅において、どのように過ごしたかが今後重要になる。悶々と過ごすのか、「やりがい」や「生きがい」を見つけて、ステップアップして本設に移るかは全然違うことだった。そこで、我々はNPO法人を立ち上げ、仮設住宅支援や自治会をサポートすることとした。実際、自治会長はすごい苦労をしており、例えば、物資を頂くのは有難いが、自治会員全員分まとめて置いていけるので、自治会長が一人で分配している状況だった。そこには、不平や不満が当然出て来てしまう。また、仮設住宅には救済物資を支援し易いため、仮設住宅への支援が主になってしまったことから、在宅避難者と仮設住宅生活者との間で、食料分配などで溝が出来てしまっていた。どちらも被災者に変わりはないが、仮設の人達から見ると、在宅避難者は家があるから良いじゃないかとなってしまふ。被災後間もない頃は、家がある人達は、炊き出しなどをして、仮設の人達を助けた頑強な繋がりがあったが、仮設暮らしになってからは、そのコミュニティが崩れつつあるのは残念だ。私達は、3、11以来コミュニティに助けられてきたのだと強く思っている。

■地域の住民を主体にして

全国、全世界から支援の手が差し伸べ